

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

第三部

陸上自衛隊医官任官 と 研 修 医 生 活

何とか無事に6年間で防衛医大を卒業、医師国家試験に合格して、臨床医・自衛隊医官への道を歩むことができるようになりました。陸・海・空の選択に関しては、幼い頃から船酔いで苦しんだ経験(豊後水道を渡って久留米から宇和島まで帰省)から、海上・航空自衛官は無理と思い、地べたを這って戦う陸上自衛隊を選択しました(父も陸上自衛官で、祖父も陸軍少尉：フィリピンにて戦死)。卒業後に幹部候補生学校(久留米市)で過ごした2ヶ月間は、10年ぶりに戻った高良内の環境で過ごすことができました。自衛官としての教練、高良山マラソンは大変でしたが楽しいひとときでした。学生時代の停学は帳消しとなり、幹部候補生学校の成績は上位で、将来を嘱望される立場となったのには驚きを禁じ得ませんでした。

防衛医大での研修中はすべての分野が興味深く、どの専門に進むか迷いましたが、学生時代からおぼろげに考えていたように母敦子の糖尿病、祖母カメヨの甲状腺疾患という因縁から、内分泌・糖尿病という専門分野を第一候補として研修を開始しました。研修医として最初に配属されたのは防衛大救急部でした。外科志望者は麻酔科が必須であり、救急部を希望する研修医がないという消極的理由で私は選択されました。まずは基本的な救命救急法を身につけようと思いましたが、同時に農業での自殺、西武線への飛び込み、熱傷、バイク事故など様々な方への対処を経験させていただきました。人命を助けるために日々努力しながらも後遺症を持ち生活していくこととなる患者さんの将来を憂い、医療の限界と現実を思いを馳せました。また、研修医官棟は救急部のそばにありましたので、毎夜の救急車のサイレンが耳について、病院にいなくてもこだまして聞こえる状況でした。全般としての研修医生活は楽しく、また様々な勉強の機会が無料さらには食事付きで与えられるのには驚きました。抗生物質の使い



結婚式での記念写真
(私と雅代)

方、循環器系疾患の診断・治療法など、当時は若い医者育てていこうという気風が強かったように思います。最初のボーナスではNECの98式コンピュータとプリンター一式を自己投資として買ったのを覚えております(当時50万円ほどでした)。

その後、第二外科(胸部外科・腹部外科・乳腺内分泌外科)、第三内科(内分泌・神経内科・呼吸器科・血液内科)、眼科、皮膚科、整形外科などをローテートし、一般内科を三宿の自衛隊病院と共済組合連合会三宿病院で研修させて頂きました。研修後に再び何を専門にするかは再度様々に悩みましたが、当時第三内科助教授であり後に教授となられた永田先生の真摯な姿に、先生を中心とした方々と内分泌・糖尿病を研修してみたいと考えました。その当時読んでいた本に「師匠を超えるのは困難だが目標として近づくことは可能である」ということが書かれていたように思います。

2年間の初任実務研修の後は、初めての部隊勤務あるいは自衛隊病院勤務となり、全国各地どこに赴任するか分からないわけですが、その前に身をまとめようと考え雅代と結婚しました。結婚式は自衛隊と縁が深い市ヶ谷会館で挙げ、その後私にとっては初めての海外渡航としてハワイに新婚旅行に行きました。雅代は英文科卒で、学生時代からイギリス、アメリカに短期留学しておりましたので英会話などお手のものでしたが、私とえば読み書きはできるものの当時会話はからきしだめで、帰ってきてからも雅代にさんざんからかわれたものでした。

続く第四部では、第12師団後方支援連隊(群馬県新町)勤務、テキサスでの射撃訓練支援、長男雄樹の誕生などを回顧したいと思います。